

# 日本コミュニケーション学会 第46回年次大会

## コミュニケーションとパワー

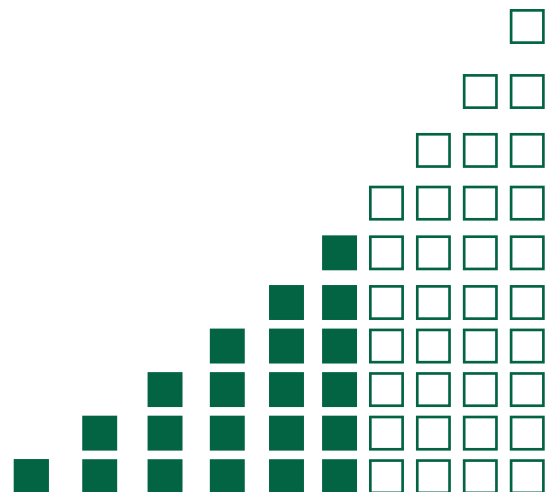
Communication & Power

西南学院大学（福岡市早良区）

2016年6月11日(土)～6月12日(日)

June 11-12, 2016

Seinan Gakuin University



## [大会参加者へのご案内]

1. 受付は、西南学院大学コミュニティーセンター1階にあります。会場は同じ棟ですが、それぞれの会場へ入る前にそれぞれの会場へ入る前に、必ず受付にお立ち寄りください。
2. 大会参加費は、2日間で会員 4,000 円（当日払いは 4,500 円）、非会員の方は 5,000 円です。参加費にはプロシーディングス代を含みます。参加ご希望の方は（会員・非会員同様に）、学会ホームページを通じて、6月3日（金）までにお申込み下さい。年次大会へはJCA 学会ホームページよりオンラインでお申込み下さい。振込用紙は同封しておりません。
3. 昼食に関しては、両日ともお弁当を用意しております。お弁当をご希望の方は、大会参加の申し込みと一緒に、ホームページからオンラインでお申込み下さい。飲み物付きで一食 1,000 円です。
4. 懇親会の参加費用は 5,000 円です。当日参加も可能ですが（若干名）、予約の関係上できるだけ大会参加の申し込みの際に合わせてお申込み下さい。懇親会申し込みは大会参加申し込み同様に、学会ホームページからお願いします。懇親会会場は、ザ・レジデンシャル・スイート福岡内にあるレストラン、パエージャ・デ・オーロで開催されます。地元で採れたブランド野菜である糸島産無農薬、減農薬野菜や魚で有名なおしゃれなお店です。ふるってご参加ください。
5. 年次大会の受付周辺にて、書籍やジャーナルのバックナンバー等の販売を行っています。また、飲み物等の用意が参加者控え室にございますのでご利用ください。
6. 会場内は禁煙です。所定の喫煙所をご利用ください。

## [発表者の方へ]

1. 機器をお使いになる方は、操作等の確認を予めお願いいたします。パソコン（Windows）、Windows 用のケーブル、プロジェクター、およびスクリーンは発表教室の全てに設置されています。Mac をご利用で、Mac を持参される方は、ケーブルもご用意ください。また、操作については午前中の発表の方は、最初のセッションが始まる前、午後の方は昼休みにご確認ください。
2. 研究発表は、質疑応答を含めて 30 分です。時間厳守でお願いします。
3. 研究発表をなさる方は、完成論文のコピーを当日お持ちください（目安として 20 部程度）。必ず 1 部を受付にご提出ください。それぞれの発表会場で、各自コピーを配布してください。プロシーディングスの原稿は完成原稿ではありません。この点十分にご留意ください。会場にはコピーする場所がございませんので、その点もご注意ください。
4. やむを得ない事情で発表ができなくなった方は、すみやかに学術局までご連絡ください。なお、当日の緊急連絡は下の囲みの 3 つのメールアドレスに同時発信でお願いいたします。

## [司会の方へ]

1. 発表開始 10 分前までに会場に入り、発表者と事前の打ち合わせを行ってください。
2. 発表開始と発表終了の時間を厳守してください。発表終了の時刻になったら、次の研究発表に移ってください。
3. 発表が取り消しとなった場合は、次の発表の前倒しをしないで、その時間帯をあけておいてください。事前に研究発表の取り消しを学術局が把握している場合は、その旨をお伝えします。

## [理事の方へ]

1. 大会前日の 6 月 10 日（金）に、西南学院大学コミュニティーセンター2階のプロジェクトルームにて理事会が開催されます。時間は 15:00～17:00 です。ご参集よろしくお願い申し上げます。

<b>事前問い合わせ先： 会場校担当（大会実行委員長）</b> 野中昭彦 〒814-0198 福岡市城南区別府 5-7-1 中村学園大学 E-mail: anonaka@nakamura-u.ac.jp
<b>発表・論文について：学術局</b> 坂井 二郎 E-mail: jisakai@ed.tokyo-fukushi.ac.jp
<b>事前問い合わせ（参加費等について）及び当日問い合わせ先：</b>
<b>事務局</b> 清宮 徹 E-mail: cajoffice@caj1971.com

### [Information for Participants]

1. Please register at the registration desk upon your arrival, located in the first floor in Community Center at Seinan Gakuin University.
2. The conference fee for two days is ¥4,000 (¥4,500 at the door) for members and ¥5,000 for non-members. Please pay through the on-line registration by June 5 or at the reception desk during the conference.
3. Box lunches can be purchased for Saturday and Sunday, payable in advance by the on-line registration (the price is ¥1,000 per lunch; including a drink)
4. The convention dinner will be held at Paella de Oro in The Residential Suites Fukuoka. The fee is ¥5,000, payable only in advance by the on-line registration, or at the conference desk on a first-come-first-served basis (limited to about 10 people).
5. Books and back issues of JCA journals are to be on sale and some refreshments are available near the reception desk.
6. Smoking is strictly prohibited in and around the building.

### [To Presenters]

1. All rooms are equipped with PC (Windows), PC cables, projectors, and screens. If you are a Mac user, you can bring it with a cable connector. You are advised to try out the equipment prior to your presentation, either before the first session starts or during lunch time.
2. The length of presentation is 30 minutes, including questions and answers. Please adhere strictly to the punctual start and finish times of the presentation.
3. Presenters are requested to bring copies of their full papers on their presentation, and a copy of your paper must be submitted to the registration desk. Be aware that extended abstract included in the conference proceedings is not a full paper. One MUST get prepared for paper distributions (approximately 20 copies may be needed).
4. In case of cancellation of the presentation, please notify the Office of Academic Services in advance, or any accidental cancellation should be notified by an e-mail to all three addresses listed below.

### [To Session Chairs]

1. Please be at the designated room 10 minutes prior to the start of the session.
2. Strictly adhere to the start and finish of each presentation.
3. In case of cancellation, do not proceed immediately to the next presentation but leave the time slot intact. You will be notified when any accidental cancellation should happen beforehand.

### [To JCA Officers]

1. JCA officers meeting will be held at 15:00 though 17:00 on Friday, June 10 at Seinan Community Center.

#### General Inquiry:

Akihiko Nonaka (Program Chair)

Nakamura Gakuen University, 5-7-1 Befu, Jonanku, Fukuoka, Japan 814-0198

E-mail: anonaka@nakamura-u.ac.jp

#### Inquiry about presentation/papers before the convention:

Director of Academic Affairs (Conference Planning) Jiro Sakai

E-mail: jsakai@ed.tokyo-fukushi.ac.jp

#### Inquiry about sees before the convention and any inquiry during the conference

Executive Secretary Toru Kiyomya E-mail: cajoffice@caj1971.com

# スケジュール

## 第1日 6月11日(土)

	メイン会場 (ホール)	A会場 (1階A)	B会場 (2階B)
セッション 1 10:00-11:30	特別企画 パネル I 坂井		
支部会及び昼食 11:40-12:30	北海道(1階A), 東北(2階), 関東(ホール), 中部(ホール), 関西(ホール), 中国四国(2階休憩室), 九州(ホール)		
セッション 2 12:30-14:00	特別企画 パネル II 丸山	組織 大橋	レトリック 菅家
14:10-15:00	会場:ホール 総会 司会: 清宮 徹 挨拶: 五島 幸一(JCA会長) K.J. シャフナー(西南学院大学学長)		
15:10-16:10	会場:ホール 学術講演 Kent Alan Ono (ユタ大学)		
セッション 3 16:20-17:50	レトリック研究会 田島		
18:10-	懇親会 パエージャ・デ・オーロ (司会: 大会実行委員)		

## 第2日 6月12日(日)

	メイン会場 (ホール)	A会場 (1階A)	B会場 (2階B)
セッション 4 9:00-10:30	高齢者福祉 (パネル) 山口	コミュニケーション教育 師岡	ジェンダー 末田
セッション 5 10:40-12:10	文化シフト (パネル) Shearman	メディア 五十嵐	コミュニケーションと文化 宮崎
12:10-13:00	昼食		
セッション 6 13:00-14:30	コミュニケーション研究会共催パネル 池田(理)		

# Schedule

## Day I - Saturday, June 11

	Main Hall	Room A (1F•A)	Room B (2F•B)
<b>Session 1</b> 10:00-11:30	Special Panel I  Sakai		
<b>Chapters &amp; Lunch</b> 11:40-12:30	Hokkaido (Room A), Tohoku (Room B), Kanto (Hall), Chubu (Hall), Kansai (Hall), Chugoku-Shikoku (2F lounge), Kyushu (Hall)		
<b>Session 2</b> 12:30-14:00	Special Panel II  Maruyama	Organization  Oohashi	Rhetoric  Kanke
14:10-15:00	<b>Hall</b> General Assembly MC: Toru Kiyomiya Koichi Goshima (President of JCA) K.J. Schaffner (President, Seinan Gakuin University)		
15:10-16:10	<b>Hall</b>  Keynote Address by Kent Alan Ono (University of Utah)		
<b>Session 3</b> 16:20-17:50	Division of Rhetorical Studies  Tajima		
18:10-	Convention Dinner	Paella de Oro	

## Day II - Sunday, June 12

	Main Hall	Room A (1F•A)	Room B (2F•B)
<b>Session 4</b> 9:00-10:30	Panel Session Ageing Society  Yamaguchi	Communication Education  Morooka	Gender  Sueda
<b>Session 5</b> 10:40-12:10	Cultural Shift  Shearman	Media  Igarashi	Communication and Culture  Miyazaki
12:10-13:00	Lunch		
<b>Session 6</b> 13:00-14:30	Communication Research  R. Ikeda		

## 学 術 講 演 Keynote Address

### The Shifting Landscape of Asian Americans in the Media

**Kent Alan Ono**

**University of Utah**

While, historically, much research about Asian Americans in the Media has focused on stereotypes, the current media landscape includes alternative and potentially transformative representations. Bolstered by social media, Asian American involvement in the production of media has had a powerful effect on the overall media landscape. This transformation has implications for racial imagery in Japan. Specifically, from news media to YouTube to independent filmmaking, Asian American media offer, if not better representations, then more of them.

#### 【経歴】

**ケント・アラン・オノ** Kent Alan Ono, Ph.D. (University of Utah)

マイアミ大学で修士号(コミュニケーション学)、アイオワ大学で博士号(レトリカルスタディズ)を取得。現在はユタ大学のコミュニケーション学科長・教授。活字媒体、フィルム、テレビなどのメディアにおける批評的、理論的研究を専門とし、特に人種、性差、階級などの描写について幅広く追究している。今回の講演ではアジア系アメリカ人が、アメリカのメディアによって、どのように反映されているのかについて話す予定。

## 特別企画 パネル I

### コミュニケーション研究と社会実践

司会： 坂井 二郎（東京福祉大学）  
話題提供者： 坂井 二郎（東京福祉大学）  
高井 次郎（名古屋大学）  
長谷川 聡（北海道医療大学）  
森泉 哲（南山大学短期大学部）

去年の学術局セッションではジャーナルの在り方に焦点をあてたセッションを企画し本学会のジャーナルの未来について活発な議論が行われた。その影響もあってか現在では少しずつではあるが論文投稿数も英語論文も含め増えつつある傾向にある。

今年度の学術局セッションでは、今までとは少し視点を変え、「コミュニケーション研究と社会実践」をテーマとしてコミュニケーション研究における社会実践の可能性について考えていきたい。研究者は、社会の中でその研究を行う限り、その研究活動は社会的実践行為の側面も有する。またその研究成果を論文として発表するという行為自体も、他の読者・研究者の目に触れ影響を与えるという点において社会的実践といえる。特にコミュニケーション研究は、その内容が何であれ、「人間」にまつわる何かを研究しているという点では共通しており、その研究活動は社会的実践と不離不足の関係にあるといっても過言ではない。

以上の前提の下で、本セッションでは、コミュニケーション研究の知見が研究者の日常生活を含む社会生活にどのように活用されているかについて議論したいと思っている。言い換えればコミュニケーション研究の知見が研究者の生活の中でどのように体現化（受肉化・身体化）されているかを語ってもらうことで、コミュニケーション研究における社会実践と知行同一の可能性について探索していくセッションとしたい。

## 特別企画 パネル II

### 九州におけるコミュニケーション学のオーラルヒストリー

コーディネーター: 丸山 真純 (長崎大学)  
司会: 師岡 淳也 (立教大学)  
パネリスト: 橋本 満弘 (前西南女学院大学)  
佐藤 勇治 (熊本学園大学)  
畠山 均 (長崎純心大学)

今年で2回目となる「オーラル・ヒストリー企画」は、年次大会開催地にちなみ、九州地区におけるコミュニケーション研究・教育のオーラル・ヒストリーである。JCA九州支部は、数年前に20周年を迎え、その記念誌も出版されている。また、支部紀要も着実に巻を重ねている。本パネルでは、JCA九州支部の発展に多大な貢献をされてきた、橋本満弘先生、佐藤勇治先生、畠山均先生の3名の先生をお迎えする。この3名の方へ、近年、精力的に、コミュニケーション学のオーラル・ヒストリー研究を行っている、師岡淳也先生によるインタビューを通じて、3名の方のコミュニケーション学との出会い、JCA九州支部の黎明期と発展、JCA本部や米国のコミュニケーション学との関わりなどについて、話を伺っていく予定である。支部紀要、ニュースレター、20周年記念誌など文字化された資料からは得られないコミュニケーション学のあゆみが明らかになるであろう。4氏によるやり取りだけでなく、フローワーの方々とのやり取りを通して、コミュニケーション学のあゆみの一端を共有し、未来へつなぐことができれば幸いである。



＜パネル＞  
レトリック研究会  
Japan Society for Rhetorical Studies

Panel Discussion

**Non-working Youth, Hibakusha, and Popular Music: Interrogating  
Rhetoric and Power in Contemporary Japan**

**Panelists:** Noriaki Tajima (Kanda University of International Studies)

Katsuya Koresawa (Hiroshima Shudo University)

Satoru Aonuma (Tsuda College)

**Chair:** Mitsuhiro Fujimaki (University of Shizuoka)

**Respondent:** Junya Morooka (Rikkyo University)

This English-language panel explores the advocacy of non-working youth, the representation of hibakusha, and the relationship between political activism and popular music. It represents a diversity of unique views and issues, while simultaneously being united by a core, common pursuit of examining and embracing political activism. Featuring three case studies, this panel depicts the very essence of the conference theme, “communication and power.”

The first study analyzes a 2013 book, Complete guide for the life of home guards, and the guards’ costume performances. The paper contends that it answers old, negative subjectivization of domestic precarious workers, which was once prevalent since Japan’s neoliberal deregulations in the last two decades. Also, the study claims that the burlesque mode of representation—framing the youth as being almightily powerful versus public image of youths as being totally enervated, lazy and dependent—fits particularly well to this strategy, threatening the previous capitalist hegemonic order that signified them as the abandoned group of people.

Second study critically investigates Hersey’s *Hiroshima* (1946) through a critical framework of Gramsci’s theories of Hegemony, Intellectuals, and Subaltern. The research focuses on different opposite ideologies such as survivors and victims, intellectual priests and naive Buddhists, and original sin and the Redemption. The author attempts to criticize dominant representations of nuclear survivors and to discover how the text marginalizes atomic bomb victims.

The final study presents a rhetorical analysis that explores the relationship between political activism and popular music. Extending Cloud and Feyh’s (2015) study of *The Internationale*, the research engages an analysis of three Japanese performances of this international socialist anthem from a critical-rhetorical perspective.

This panel discusses the intersections among performance, public discourse and political activism. With papers, we hope to provide an enriching moment to interrogate questions of political and rhetorical efficacy.

## <パネル>

### コミュニケーション教育研究会共催

## ヘルス・コミュニケーション教育の可能性を探る

話題提供者： 池田理知子（国際基督教大学）  
五十嵐紀子（新潟医療福祉大学）  
石橋 嘉一（青森中央学院大学）  
野中 昭彦（中村学園大学）

近年、医療・福祉系の大学では、教養や基礎科目にコミュニケーションを教える教科を設けているところが増えてきている。JCA 会員のなかにもそうした科目を担当している教員は少なからずいるだろうが、これまでそれぞれがどのような教育実践を行っているのかの情報が学会レベルで共有されることはなかったのではないだろうか。特に、年次大会でそうした科目で何をどのように教えているのかといった意見交換が十分になされたことはなかったように思われる。したがって今回のパネルで、コミュニケーション技術の習得を目的とするだけにとどまらないヘルス・コミュニケーション教育の実践をどのようにして行っていけばいいのか、どのようなテキストを使えば教育効果があがるのかといった具体的な課題を話し合う機会をもつことの意味は小さくない。

今回のパネリストは、『よくわかるヘルス・コミュニケーション』（ミネルヴァ書房、近日刊）の編集・執筆に携わってきた4人である。この本は、「ヘルス・コミュニケーション」とは何か、医療や介護の現場に求められる「コミュニケーション」とは何かをさまざまな角度から考えることを目的としたテキストである。編集・執筆作業のなかでそれぞれが考えたことをフロアの参加者とシェアすることで、ヘルス・コミュニケーション教育が今後担うべき役割や可能性について話し合っていきたい。なお、パネリスト4人のうちの2人は医療・福祉系の大学で教えているわけではないが、それ以外の大学でもヘルス・コミュニケーションで教えられている内容をカバーすることが重要な意味をもつはずだとの意見をもっており、そのことの意義と可能性についても探っていきたい。

6月11日(土) Saturday, June 11 11:40-12:30 @ホール、A会場、B会場 : Hall, Room A, Room B

## 支部会議 Chapter Meetings

各支部でミーティングを行います。部屋割りについてはスケジュール表をお確かめ下さい。  
Chapter meetings will be held in the assigned rooms, as listed on the schedule of events.

6月11日(土) Saturday, June 11 14:10-15:00 @ホール : Hall

## 総会 General Assembly

司 会 : 清宮 徹

開会の辞 : 五島 幸一 (愛知淑徳大学・日本コミュニケーション学会 会長)

挨拶 : K. J. シャフナー (西南学院大学 学長)

6月11日(土) Saturday, June 11 18:10- @ パエージャ・デ・オーロ

## 懇親会 Conference Dinner : パエージャ・デ・オーロ

司会 : 野中 昭彦 (中村学園大学 大会実行委員長)

多くの皆様と交流を図りたいと思います。懇親会は19:00に開始。懇親会場は、大会会場から徒歩5分ほどの会場です。皆さまのご参加をお待ちしております。

会費 5000 円、大会申込みの際同時に申込み下さい。 \*当日申し込みは、11 日午前中までに (先着 10 名程度)。

## 書籍・教育機材の展示

大会会場の休憩スペース(受付周辺)にて、各種の展示を行っています。ご自由にご覧ください。

A variety of educational materials are to be displayed beside the reception desk.

### ◆ 宿泊のご案内

本年次大会の会場が西南学院大学のため、会場までの交通手段をご考慮し、地下鉄駅周辺のご宿泊をお勧めします。

### ◆ 昼食のご案内

大学内の食堂はお休みしています。また、大学周辺にはレストランなどの施設があまり多くありません。お弁当をご希望の方は、オンライン申込みのサイトから、大会申し込み時に一緒に申し込み下さい。

6月11日(土) Saturday, June 11

受付 9:30～ Registration commencing at 9:30

時間	会場	プログラム Session
10:00   11:30	ホール	<p>&lt;セッション 1&gt;</p> <p>特別企画 パネル I コミュニケーション研究と社会実践</p> <p>Special Panel I</p> <p>司会：坂井 二郎（東京福祉大学） 話題提供者：坂井 二郎（東京福祉大学） 高井 次郎（名古屋大学） 長谷川 聡（北海道医療大学） 森泉 哲（南山大学）</p>
11:40   12:30	1階A 2階B ホール ホール ホール 2階休憩室 ホール	<p>支部会議 Regional Chapter Meetings</p> <p>北海道支部 Hokkaido 東北支部 Tohoku 関東支部 Kanto 中部支部 Chubu 関西支部 Kansai 中国四国支部 Chugoku &amp; Shikoku 九州支部 Kyushu</p>
13:00   14:30	ホール        A会場 (1階A)      B会場 (2階B)	<p>&lt;セッション 2&gt;</p> <p>特別企画 パネル II</p> <p>Special Panel II</p> <p>コーディネーター：丸山 真純（長崎大学） 司会：師岡 淳也（立教大学） 話題提供者：橋本 満弘（元西南女学院大学） 畠山 均（長崎純心大学） 佐藤 勇治（熊本学園大学）</p> <p>組織 Organizational Communication</p> <p>司会：大橋 理枝（放送大学）</p> <p>1. 採用面接時の志願者の非言語行動が第一印象に与える影響—表情・視線・うなずきの視点から— 江頭 万里子（長崎女子短期大学） 大橋 理枝（放送大学）</p> <p>2. Cultural Differences in Crisis Communication: The Case of McDonald's Japan Katharina Drokur（西南学院大学）</p> <p>3. 組織における個人の行動の生起—解釈主義アプローチによる検討— 池田 章子（明治大学大学院生）</p> <p>レトリック Rhetorical Communication</p> <p>司会：菅家 知洋（東海大学）</p> <p>1. 失われた議論の行方 平野 順也（熊本大学）</p> <p>2. 修辞学の人類学機械：1964年万国博覧会とサイボーグ・リンカーン 菅野 遼（ミネソタ大学大学院博士課程）</p>

時間	会場	プログラム Session
14:10   15:00	ホール	<p><b>総会</b> <span style="float: right;"><b>General Assembly</b></span></p> <p>司 会：清宮 徹（西南学院大学）</p> <p>開会の辞：五島 幸一（愛知淑徳大学・日本コミュニケーション学会 会長）</p> <p>挨拶：K. J. シャフナー（西南学院大学 学長）</p>
15:10   16:10	ホール	<p><b>学術講演</b> <span style="float: right;"><b>Keynote Address</b></span></p> <p>「The Shifting Landscape of Asian Americans in the Media」</p> <p style="text-align: right;">ケント・アラン・オノ（ユタ大学 教授）</p>
16:20   17:50	ホール	<p><b>パネル レトリック研究会</b> <span style="float: right;"><b>Japan Society for Rhetorical Studies</b></span></p> <p>Non-working Youth, Hibakusha, and Popular Music: Interrogating Rhetoric and Power in Contemporary Japan</p> <p style="text-align: right;">Panelists: Noriaki Tajima (Kanda University of International Studies) Katsuya Koresawa (Hiroshima Shudo University) Satoru Aonuma (Tsuda College)</p> <p style="text-align: right;">Chair: Mitsuhiro Fujimaki (University of Shizuoka)</p> <p style="text-align: right;">Respondent: Junya Morooka (Rikkyo University)</p>
18:10 	ページャ・デ・オーロ	<p><b>懇親会</b> <span style="float: right;"><b>Conference Dinner</b></span></p> <p>九州料理を楽しみながら、交流を深めましょう。（会費 ¥5,000）</p> <p>オンラインによる事前申し込みが必要ですが、若干、当日の申し込みも可能です（先着10名程度）。懇親会場は、西南学院大学から徒歩5分です。</p>

6月12日(日) Sunday, June 12

受付 8:30～ Registration commencing at 8:30

時間	会場	プログラム Session
9:00   10:30	ホール	<p>&lt;セッション 3&gt;</p> <p><b>パネル</b> <span style="float:right"><b>Panel Discusssin</b></span></p> <p>介護施設におけるコミュニケーション・オーディット研究            ー高齢者福祉施設職員間コミュニケーションの指標開発ー            山口 生史(明治大学)・清宮 徹(西南学院大学)・山口 麻衣(ルーテル学院大学)・            福山 和女(ルーテル学院大学)・藤井 薫(社会福祉法人フロンティア)・高橋 徹(社            会福祉法人東京聖労院)・大倉 美成子(上祖師谷あんしんすこやかセンター)・池田 章            子(明治大学)・照井 秀子(ルーテル学院大学)</p>
	A会場 (1階A)	<p><b>コミュニケーション教育</b> <span style="float:right"><b>Communication Education</b></span></p> <p>司会：師岡 淳也(立教大学)</p> <p>1. Complexity, Accuracy, Fluency as a Communication Paradigm: From Theory to Instructional Curriculum            Anthony Rausch (Hiroasaki University)</p> <p>2. 日本のスピーチ・コミュニケーション研究の歴史について            ー1960-70年代のカリキュラム分析を中心としてー            師岡 淳也(立教大学)</p> <p>3. 産業界からの人材育成要求に対するコミュニケーション教育の現状に関する一考察            野島 晃子(立命館大学大学院)</p>
	B会場 (2階B)	<p><b>ジェンダー</b> <span style="float:right"><b>Gender and Communication</b></span></p> <p>司会：末田 清子(青山学院大学)</p> <p>1. Identifying with Relationships or Group Affinities? An examination of the interaction between overseas            experience and gender on Japanese youths' identities            Erina Ogawa (Toyo University)</p> <p>2. 女性管理職者のコミュニケーション・スタイルに関する研究(1)            末田 清子(青山学院大学)            井上 美砂(青山学院大学)</p> <p>3. Reflecting on My/His Feminist Pedagogy:            - An Auto/ethnography of the Course "Gendered Nonverbal Communication"-            Naoki Kambe (Rikkyo University)</p>
10:40   12:10	ホール	<p>&lt;セッション 4&gt;</p> <p><b>パネル</b> <span style="float:right"><b>Panel Discussion</b></span></p> <p>Japan's Cultural Shifts, Constants, and its impact on Communication in Work, Family, and Youth Development            Sachiyo M. Shearman (East Carolina University)            Mariko Izumi (Columbus State University)            Naomi Kagawa (Shimane University)            Reiko Nebashi-Nakahara (Meiji University)</p>

時間	会場	プログラム Session
10:40   12:10	A会場 (1階A)	<b>&lt;セッション 4&gt;</b>  <b>メディア</b> <span style="float:right">Media</span> 司会：五十嵐 紀子（新潟医療福祉大学） 1. 異文化コミュニケーション教育における映画の活用 <span style="float:right">桜木 俊行（Gustavus Adolphus College）</span>  2. 介護の魅力発信事業が再生産する職業ステレオタイプについて <span style="float:right">五十嵐 紀子（新潟医療福祉大学）</span>  3. オーラルヒストリー、メディア、作者 <span style="float:right">小西 卓三（昭和女子大学）</span>
	B会場 (2階B)	<b>コミュニケーションと文化</b> <span style="float:right">Communication and Culture</span> 司会：宮崎 新（名古屋外国語大学） 1. 国語科指導要領にみる「日本のコミュニケーション」の素地 <span style="float:right">大橋 理枝（放送大学）</span>  2. 不均衡を調和するものとしての重複発話 -日本人初対面の相互行為における異ジャンル間比較から- <span style="float:right">竹田 らら（東京電機大学）</span>  3. 資本主義権力、規律権力と日本の高等教育機関の外国語教育 -いわゆる私立外大生を政治的にすることを中心に- <span style="float:right">田島 慎朗（神田外語大学）</span> <span style="float:right">宮崎 新（名古屋外国語大学）</span>

<b>昼食</b> <span style="float:right">Lunch</span>
--

13:00   14:30	ホール	<b>&lt;セッション 5&gt;</b>  <b>パネル コミュニケーション教育研究会共催</b> <span style="float:right">Division of Communication Education</span> <b>ヘルス・コミュニケーション教育の可能性を探る</b>  <span style="float:right">池田理知子（国際基督教大学）</span> <span style="float:right">五十嵐紀子（新潟医療福祉大学）</span> <span style="float:right">石橋 嘉一（青森中央学院大学）</span> <span style="float:right">野中 昭彦（中村学園大学）</span>
---------------------	-----	--

## 発表要旨

6月11日(土) Saturday, June 11 12:30-14:00 Session 2

A会場(1階A)  
Room A

研究発表  
Presentation

組織  
Organizational Communication

### 採用面接時の志願者の非言語行動が第一印象に与える影響 —表情・視線・うなずきの視点から—

江頭 万里子 (長崎女子短期大学)  
大橋 理枝 (放送大学)

企業は、社員の採用にあたり面接試験を重視しており、手法を変えて複数回実施するのがほとんどである。採用側は志願者の発することばからだけでなく、非言語行動からも採用の可否を判断する。この志願者の非言語行動が採用決定にどのように影響を及ぼしているのかを調べた先行研究は筆者が管見する限りでは数少ないことから、採用面接における志願者の非言語行動が志願者の第一印象に与える影響を調べることは、志願者にとって有益であると考えられる。そこで、志願者の非言語行動の中でも面接時に一番目に入る志願者の顔からの情報である表情(笑顔)・視線・うなずきが志願者の第一印象に与える影響を実験によって検証しようと試みた。

はじめに、採用場面での志願者の表情(笑顔)、視線、うなずきなどの非言語行動と印象形成の関係に関する先行研究を概観した。その上で、採用面接の場面を想定したビデオ(1分弱)を作成し、志願者役の若者(男女1名ずつ)の顔を映した映像を企業等の人事担当者に観てもらい、志願者の印象評定をってもらう実験を行った。結果、好印象の点数評価の上位3条件は、志願者役が男性の場合も女性の場合も「笑顔で、面接者に視線を向け、うなずきながら話を聞く」条件、「笑顔で面接者に視線を向けうなずかないで話を聞く」条件、「笑顔はないが、面接者に視線を向け、うなずきながら話を聞く」条件であり、もう一度会って話を聞きたいと評価された条件も上位3条件は同様の条件だった。つまり、好印象の点数評価が高ければ、二次面接につがる可能性も高くなると考えられた。好印象の点数評価が高い条件は、面接者に視線を向けていることが共通しており、採用面接の場では、志願者の視線が強く志願者の第一印象に影響することが分かった。

### Cultural Differences in Crisis Communication: The Case of McDonald's Japan

Katharina Drokur (Seinan Gakuin University)

In an ever more globalized world the need for effective cross-cultural communication is becoming increasingly evident. Cross-cultural awareness of communication differences is particularly important when companies face crises. Differing cultural norms and values can vastly change the interpretation and reception of different crisis communication strategies. When emotions run high failures in crisis communication can be particularly damaging to a company's reputation and even its continued survival in a country. McDonald's Japan faced two such crises consecutively in 2014/2015. The company faced considerable reputational threats from first a tainted chicken meat scandal and then a series of foreign objects discovered in McDonald's dishes. McDonald's crisis communication efforts, particularly during its first crisis in 2014, were not well received in Japan and were widely blamed on a poor cultural fit between the communication strategies of the U.S. fast giant and the expectations of its Japanese consumers.



This paper uses the case of McDonald's two consecutive food safety crises to identify differences in the Japanese and Western styles of crisis communication. Specifically, this paper will answer the research question how did cultural differences in account giving between Japan and North America affect the effectiveness of McDonald's crisis communication efforts.

Existing research in the fields of crisis communication, account giving, and cross-cultural communication is used to frame and analyze the McDonald's case. This case study provides an excellent real world example of the key difference in when, why and how different cultures employ apologies and other forms of accounts in crisis communication. The paper will utilize a qualitative approach and employ textual analysis to assess the Japanese public's response to McDonald's crisis communication. The main criticisms by Japanese stakeholders are identified, analyzed and situated into a broader cross-cultural context.

### 組織における個人の行動の生起 —解釈主義アプローチによる検討—

池田 章子 (明治大学大学院生)

既存の組織研究の中心をなす機能主義アプローチでは、個人が自らの行為を主体的かつ社会的にどのように意味づけるのかという問題は視野の外に置かれている。本稿では解釈主義アプローチをとり、組織における個人の行動の生起を、働く人々の認識や解釈の枠組みの変化を分析することによって解明するための理論的枠組みについて検討する。

社会構成主義においては、自己は言説を通して他者との関係性において築かれる「社会的過程の産物」であると捉えられている。組織のなかでは言説が自己や関係性を構築し、こうした個人と関係性によって新たな言説を生み出す、という終わりのない現象が繰り返されている。また、シンボリック相互作用論における役割理論の解釈によって、組織のなかで個人は相手との関係性において役割を意識した行動をとり、それを繰り返していくことによって、社会のなかで特有の（相互）行為の構築と、それを評価する共通の意味の構築が繰り返されると捉えられる。

本研究では、このような社会的過程における言説的な実践が組織における個人の行動の生起を解明する手がかりになることを議論し、組織における社会的実践としての言説を分析対象とする組織ディスコース研究に注目する。組織ディスコース研究においては、こうした言説が単に物事を描写するものではなく実際にそれらの物事を遂行していること、つまり、組織メンバーの日常的な態度と行動がいかに形成され影響を受けるかを示すと捉えられている。なかでも注目すべきは個人のアイデンティティ認識を表現する「自己についての語り」であり、その遂行は関係性の中で進展し、様々な行為を支持し、強化し、抑制したり、未来の行為を支持する言語的営みである。

研究発表では上述の理論的根拠を踏まえ、風土改革を推進するある企業におけるインタビューを中心としたフィールド調査の分析結果も合わせて報告する予定である。

B会場(2階B)  
Room B

研究発表  
Presentation

レトリック  
Rhetorical Communication

### 失われた議論の行方

平野 順也(熊本大学)

「なぜ人を殺してはいけないのか」と尋ねられたらどう答えるか。このような問いに対しては、ただ絶句することによって、この問いが持つ経済合理性を否定することが、単純な説明で納得させるよりも重要である。しかし、絶句は限られた状況でのみ許される。例えば国会において同じ問いが投げかけられた場合、求められているのは、議員が絶句する姿でも稚拙な説明でも強烈な感情論でもない。このような問いが誘うのは、自己の考えの精査、そして意思決定に向けた意見の交換であり、時には長期にわたって行われる建設的な議論である。

大衆が社会問題や政治に関心を持つのは、メロドラマのような娯楽として接することができる時だけだとリップマンは批判している。そのため公的な議論は、選ばれた少数者によって行われるべきだと彼は考える。もしこの選ばれた少数者が「なぜ人を殺してはいけないのか」と訊ねられたら、絶句することも感情論を述べることもなく、熟考のすえ合意形成のために様々な意見を交わすだろう。しかし選ばれた少数者が行うべき建設的な議論は現代社会において可能だろうか。

地球的規模化や高度情報化が進む社会において民主主義の土台である議論は失われているようだ。少なくとも官僚制を排除できない肥大した民主主義では、理想的な議論による意思決定過程を認めるとは困難だ。選ばれた少数者は、我々が投げかけた質問に対し絶句しつつも、安直に考えた対応策や意見を説明することによって取り繕っているだけなのかもしれない。ならば、選ばれた少数者が行なっていると考えられている議論の性質や問題はどのようなものか。換言すると、拡大した民主主義は、理想的な議論からどのような特徴を奪い、全く異なる活動へと変化させたのか。本発表では、現代社会の議論を分析し、失われた性質や問題点を指摘する。また、官僚制を切り離すことができない民主主義での、有効な議論の姿について考察する。

### 修辞学の人類学機械：1964年万国博覧会とサイボーグ・リンカーン

菅野 遼(ミネソタ大学大学院博士課程)

近年、人文社会学の領域において注目を集める新唯物主義(New Materialism)は、掴みどころのない「物質」自体や「物質化」のプロセスを捉える思考のあり方を巡る学術的議論と利害関心の衝突、その真ただ中において形成された。この新たな理論的潮流は、物質や身体、情動や装置、エージェンシーやポスト人間主義といった様々な現代批評理論の中心的概念を射程に捉えつつ、本質主義や現実主義、理想主義や人間主義といった従来の思考の枠組みには囚われない、異種混合的で移ろいゆく「物の秩序」の諸様態を取り扱っている。本報告の目的は、単に修辞学と唯物主義の結びつきを歴史的に辿り直したり、異なる理論や議論を紹介することではなく、むしろ歴史研究の新たな可能性を模索するために、「修辞学の文化的物質化」と「物質性の修辞的文化」との隙間に潜む一つの理論的視点のあり方を方向付けることにある。この物質、修辞、文化によって構成される空間を考察するため、また修辞学と物質主義の系譜学の他にもありえた可能性を指し示すために、「修辞学の人類学機械」(anthropomorphic machine of rhetoric)と呼ぶことのできる一つの装置を分析する。この装置は、1964年アメリカ合衆国ニューヨーク市で開催された万国博覧会に展示するために、第十六代アメリカ大統領エイブラハム・リンカーンをモデルにして、ウォルト・ディズニーが制作した人型の機械装置である。その装置の最大の特徴は、何と言ってもこの機械が演説をする点にある。本報告では、この「オーディオ・アニマトロニクス(Audio-Animatronics)」と呼ばれる人型機械が、「技術化した修辞的人間」という近代的想像力を垣間見せ、修辞学と新物質主義との交差点に位置する重要な文化的物質の一つであることを論じてみたい。

ホール  
Hall

パネル  
Panel Discussion

介護施設におけるコミュニケーション・オーディット研究  
－高齢者福祉施設職員間コミュニケーションの指標開発－

山口 生史 (明治大学)・清宮 徹 (西南学院大学)・山口 麻衣 (ルーテル学院大学)・福山 和女 (ルーテル学院大学)・藤井 薫 (社会福祉法人フロンティア)・高橋 徹 (社会福祉法人東京聖労院)・大倉 美成子 (上祖師谷あんしんすこやかセンター)・池田 章子 (明治大学)・照井 秀子 (ルーテル学院大学)

この企画セッションでは、標記のテーマに関して、2012年からスタートした研究プロジェクトのここまでの成果報告を行い、研究と実践のコラボレーションを実現して、コミュニケーション分野と福祉分野の両視点から介護施設における組織コミュニケーション診断の有効な指標開発の可能性を示したい。いわば、組織論・組織コミュニケーションおよび社会福祉の分野が融合した高齢者福祉施設職員を対象としたヘルスコミュニケーションの研究の一つと言えるかもしれない。高齢者福祉施設のケアの質などを職員間のコミュニケーションの観点から、十分に検討された研究は筆者の知る限りほとんどない。本セッションでは、山口生史がこの4年間の指標開発のプロセスを発表し、山口生史と山口麻衣が量的分析を一部のデータに対して行い発表する。清宮と池田は、インタビュー調査や自由回答のデータを分析し、介護施設におけるコミュニケーション問題に関して得た知見を発表する。また、介護施設で勤務する修士号を有する研究メンバーとして、研究者の視点と実践者の視点から現場の状況を分析することができる藤井、大倉、高橋、照井は、これまでに得た質的データの一部を分析し、組織コミュニケーションと介護施設従業員の組織行動・態度や介護の質との関係を報告する。福山は介護施設におけるスーパービジョンの機能の観点から、検討課題を提示する。その後、フロアのオーディエンスとのディスカッションを行い、本研究プロジェクトが、コミュニケーション分野および福祉分野の研究にいかに関与できるか、また、超高齢化社会であるわが国において、介護施設のより良い運営（質の良いケアの提供など）に職員間コミュニケーションがいかに関与できるかをフロアとともに考えたい。

\*本報告は、2012～2016年度科学研究費補助金（基盤研究 B24330177、研究代表者山口生史）助成により行われた研究の成果の一部である。

A会場(1階A)  
Room A

研究発表  
Presentation

コミュニケーション教育  
Communication Education

**Complexity, Accuracy, Fluency as a Communication Paradigm:  
From Theory to Instructional Curriculum**

Anthony Rausch (Hirotsuki University)

This presentation will outline the theoretical basis for a Complexity, Accuracy, Fluency triad as a communication paradigm and then present an instructional curriculum that leads to informed CAF use in a range of contexts. The complexity, accuracy and fluency (CAF) construct has been oriented toward performance testing and factor interaction analysis. The present research takes the view that CAF can contribute to communicative competence in L2 development.

The conceptualization of the instructional approach points to multiple and variously interacting domains of complexity, accuracy and fluency. Complexity refers to the semantic-functional properties of the language elements but also includes propositional complexity, the complexity of content as managed by the speaker. Accuracy refers to the extent to which a performance deviates from a prescriptive norm, but can also reflect varying expectations of comprehensibility, appropriateness and acceptability. Fluency is most often viewed in terms of global language proficiency; however, conceptual expansion suggests that 'communicative fluency' may imply slower and more enunciated speaking with repetition and rephrasing to ensure clarity of the utterance by the speaker and comprehension by the listener.

This presentation will introduce this conceptualization and then outline the instructional curriculum as it has been developed to date, while also reporting on semi-quantitative and qualitative research findings regarding assessments both of the paradigm itself and student reaction to the instructional approach. The research aims to development of an instructional curriculum for developing communicative competence in EFL, but with applicability to improved communication competence in first language use as well.

**日本のスピーチ・コミュニケーション研究の歴史について  
—1960-70年代のカリキュラム分析を中心として—**

師岡 淳也 (立教大学)

本論文ではマス・コミュニケーション研究が主流であった1960-70年代の日本の大学においてスピーチ・コミュニケーション関連科目が導入されていく過程を辿るとともに、その要因について分析することを目的とする。具体的には、1970年代に複数のスピーチ・コミュニケーション関連科目を開講していた青山学院大学、国際基督教大学、日本大学、西南学院大学、南山大学のカリキュラム分析を中心に論を進めていく。資料・情報の収集にあたっては、上述の大学で文献調査を行うと共に、1970年代にこれらの大学で教鞭をとっていた泉マス子、岡部朗一、川島彪秀、久米昭元にインタビュー調査を実施した。さらに、1960-70年代に刊行されたコミュニケーション関連の書籍や新聞記事にも目を通し、当時のコミュニケーション研究をめぐる社会的・学問的動向にも着目しながら分析を進めていった。

今回の調査を通して明らかになったのは以下の2点である。一つ目は、戦後日本のコミュニケーション研究はマス・コミュニケーション研究中心であったが、1960年代半ばから徐々にその対象が広がりをみせはじめ、

「パーソナルなコミュニケーション」を重視するスピーチ・コミュニケーション研究が受け入れられる土壌が限定的ではあるが存在していたことである。二つ目は、1950年代後半より続々と創設された外国語学部・学科の存在がスピーチ・コミュニケーション関連科目の導入を後押ししたことである。

本論文では、上記の5大学におけるカリキュラムの変遷を辿るだけでなく、その過程でスピーチ・コミュニケーション研究者の多くが所属していた太平洋コミュニケーション学会や日本時事英語学会が果たした役割についても論じていく。最後に、本論文が用いる制度史 (institutional history) 的アプローチに基づく学問史研究の意義についても考察することにした。

### 産業界からの人材育成要求に対する コミュニケーション教育の現状に関する一考察

野島 晃子 (立命館大学大学院)

大学全入時代に入り、大学での学びと企業などにおける職務遂行能力との不一致が問われはじめている。社団法人日本経済団体連合会 (2014) のアンケート調査結果や、厚生労働省がおこなった調査結果からは、企業が大学新卒者の採用に際し、コミュニケーション能力を重視している傾向が明らかとなっている。同時に、企業が大学生に不足している要素としてあげるものにもコミュニケーション能力が含まれている。しかし、学生自身が不足していると認識しているものは、語学力・専門知識・資格である。つまり、コミュニケーション能力が重要視されながらも、現実にはその能力が不足しているばかりではなく、企業と学生との意識にギャップが生じているといえる。

そこで、ギャップが生まれる原因のひとつに、大学教育におけるコミュニケーション能力育成への取り組みと企業が求める人材の要素の不一致があげられるのではないかという仮説を立てた。まず、日本の4年制大学に設置されているコミュニケーション関連の学部・学科が育成しようとしている学生像の要素を大学のウェブサイトから分析した。そして、日本を牽引する大手企業100社が大学新卒者に求めている人材の要素との比較を通して、コミュニケーション能力育成に必要な大学における教育について考察した。

その結果、大学生に求められる能力とその実力とのギャップを生み出している要因として次の2つが考えられた。1つは企業側が育成を要求している要素と大学が育成したい要素の相違、もう1つは教育する場合に想定する、実社会における能力の使用場面や対象を設定する困難さである。

B会場(2階B)  
Room B

研究発表  
Presentation

ジェンダー  
Gender and Communication

### Identifying with Relationships or Group Affinities?

An examination of the interaction between overseas experience and gender on Japanese youths' identities

Erina Ogawa (Toyo University)

This presentation looks at the results of a recent investigation into the interaction between overseas experience and gender in cultural identities of Japanese university students. To examine differences between those who have studied abroad and those who have not, as well as between males and females, the researcher created by a Likert-type questionnaire based on Gee's (2000) four perspectives of identity. A discriminant analysis was performed on four independent variables, which were obtained from Gee (2000): Nature, Institution, Discourse and Affinity. The set of variables was entered into the model in order to determine what weighted combinations of predictors would best maximize differences among the four groups distinguished by overseas experience and gender.

Results of the discriminant analysis indicated that Function 1, which was marked by positive scores on Affinity and negative scores on Discourse, primarily separated those who studied abroad from those who did not. Function 2 primarily separated the respondents without study abroad experience by gender and suggests that females tended to have stronger Discourse identities. These results suggest that the interplay between gender and overseas experience differentiate the identities of Japanese university students' cultural identities and that males in particular have different identification patterns dependent on overseas experience. While males without overseas experience identified more strongly with the groups they were affiliated with, males who had lived abroad (as well as females in both groups) tended to identify more with their relationships with other people. This suggests that identities of Japanese university students are dependent on gender and experience, specifically experience living in a foreign country.

Gee, J. P. (2000). Identity as an analytic lens for research in education. *Review of Research in Education*, 25, 99-125.

### 女性管理職者のコミュニケーション・スタイルに関する研究(1)

末田 清子 (青山学院大学)  
井上 美砂 (青山学院大学)

本発表の目的は、日本の女性管理職者のコミュニケーション・スタイルに関する探索的研究(科学研究費基盤C一般15K04373)の初年度の成果の一部を報告することである。

一般社団法人日本経営協会(2014)が女性管理職者の意識や能力に焦点を当てて行った調査によると、数ではまだ欧米のレベルに届かないが、女性管理職者に対して「高いコミュニケーション能力」が期待されているという。しかし、これまでコミュニケーション学的な視点から日本の女性管理職者について成された研究は過少である。一方、米国には男女管理職者のコミュニケーション・スタイルの違いを示唆する研究(例:Tannen, 1994; Wood, 2013)があるが、それが日本において当てはまるかについて検討されてきてはいない。

そこで、2015年4月から9月までに東京都および札幌市内のさまざまな業種の企業・組織の女性管理職者およびその協働者（男女）17名に対して半構造化面接を行い、構成主義版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Charmaz, 2014)を用いて分析した。今回の発表では、外資系IT企業に勤務する6名(30歳代~60歳代の男女)の研究参加者のデータを中心に報告する。

主に以下の3点が調査結果として注目に値する。1) 先行研究の主張に合致した点として、非言語コードへの感受性の豊かさが女性の「特有な能力」であるとする認識が共有されていた。2) 自分から相手に合わせようとする柔軟性や、丁寧なコミュニケーションを行うことで相手の心情を十分に汲み取り、相手のフェイス(面子)(末田, 2012)を尊重することの大切さも指摘されていた。3) 管理職者のコミュニケーション・スタイルに対する評価や、管理職者としての評価は流動的であることが示唆されていた。

**Reflecting on My/His Feminist Pedagogy:  
- An Auto/ethnography of the Course “Gendered Nonverbal Communication”-**

Naoki Kambe (Rikkyo University)

Although female students' participation in higher education in Japan has increased rapidly in the last few decades, it has not yet led to gender equality in labor market and society (OECD, 2012). Through my experience of teaching communication related courses at several universities, I came to realize that higher education and communication education in Japan including what I had taught before helped maintain gender inequality. This realization has encouraged me to design and offer a new course, what I call, “Gendered Nonverbal Communication,” which sets the following objectives: 1) to understand how gender identities are constructed, maintained, and challenged through nonverbal communication; 2) to interrogate the take-for-granted in our everyday nonverbal communication and understanding of femininity and masculinity. To achieve these objectives, I employ feminist pedagogy which could be characterized by the following four aspects: participatory learning, validation of personal experience, encouragement of social understanding and activism, and development of critical thinking and open-mindedness (Hoffmann & Jayne Stake, 1988).

In this paper, I discuss not only my feminist pedagogy including the course content and activities but also students' and my reflections on the course “Gendered Nonverbal Communication” using several qualitative research methods including autoethnography, ethnography, and the analysis of written documents. Through this paper, I aim at evaluating the impact of teaching new ways of seeing the world and articulating possibilities of feminist pedagogy in communication education. Furthermore, I attempt to encourage both teachers and students of communication to participate in closing the gender gap in Japan.

ホール  
Hall

パネル  
Panel Discussion

**Japan's Cultural Shifts, Constants, and its impact on Communication in Work, Family, and Youth Development**

Sachiyo M. Shearman (East Carolina University)  
Mariko Izumi (Columbus State University)  
Naomi Kagawa (Shimane University)  
Reiko Nebashi-Nakahara (Meiji University)

Japanese society went through a drastic change both economically and culturally after WWII. In this panel, presenters will discuss how Japanese culture has shifted after WWII and how its shift has impacted on our relationships and communication in various contexts – work, family, and in youth development.

Nebashi claims that understanding Japanese professional relationships and communication practices requires an examination of several Japanese employment system. Although the main features of Japanese company culture (lifetime employment, the seniority system, and the enterprise trade unions) have been under significant pressure to change due to economic deterioration, these main features are still viable in practice and helpful to understand decision-making, leadership, teamwork, and formal/informal communication in a professional and organizational context.

Kagawa and Izumi review Japanese popular youth cultures and its impact on the nature and process of youth development. Agriculture has been an “uncool” industry for many of the Japanese youth. As an industry, it has been struggling to attract Japanese youth, and the population engaged in agriculture has been steadily declining in Japan after the WWII. Going beyond the realm of fashion and trend, “no-gals” (farm gals) takes up this uncool industry. Kagawa and Izumi illustrate how no-gals promotes positive youth development, changing the youth’s self-perception and their position in the society.

Shearman examines the changes family demographics, dating/marriage, and family communication in Japan. In contrast to traditional three-generational household as depicted in a popular animation about a family, Sazae-san, Japan now enjoys a variety of family types. Japan is facing rapidly aging society with low fertility rate, characterized with smaller family sizes. Along with these family demographic changes, family values are changing. The review literature in dating, marriage, and family communication indicates “duality” where Japanese people are balancing traditional values and modern values in various aspects of their lives as they maintain family relationships.

A会場(1階A)  
Room A

研究発表  
Presentation

メディア  
Media

**異文化コミュニケーション教育における映画の活用**

桜木 俊行 (Gustavus Adolphus College)

本発表ではまず異文化コミュニケーション教育に映画を活用する利点と注意点について述べ、映画の利用を計画する際に考慮すべき要因を整理した上で、異文化コミュニケーション教育に役立つと考えられる作品を関連理論・概念ごとに分類しながら紹介する。異文化コミュニケーション教育に映画を活用する利点として、講義・教科書から得られる知識を補完する行動・感情レベルの理解、学生の授業への主体的な参加、さらには生涯学習を促進する効果が挙げられる一方、文化の違いの誇張やステレオタイプの描写に注意する必要がある。教師が映画の利用を計画する際には、文化比較を主な目的とする「cross-cultural」アプローチと文化的背景の異なる登場人物の間のコミュニケーション分析に重点を置く「intercultural」アプローチの違いに留意しながら、焦点を当てる理論・概念の性質によって映画全編あるいはクリップの使用を選択する必要がある。一般的に言語・非言語コミュニケーション・スタイルなど具体的な行動として観察しやすい事象についてはクリッ



ブの使用が効果的である一方、偏見・差別が被害者に与える影響など感情レベルの理解が重要なトピックおよび異文化適応過程など時間の経過に伴い徐々に変化する事象については映画全編を見てもらう必要がある場合が多い。配布する映画リストにおいては、異文化コミュニケーション教育に役立つと考えられる作品を主要トピック（コミュニケーション・スタイル、文化的価値観、偏見・差別、共文化とアイデンティティ、宗教間対話、文化変化、異文化適応）ごとに分類した。

## 介護の魅力発信事業が再生産する職業ステレオタイプについて

五十嵐 紀子（新潟医療福祉大学）

日本の高齢者人口がピークを迎える 2025 年には、介護職が現在よりさらに 100 万人必要になるという試算が厚生労働省（2014）より示され、今後さらに加速する少子高齢社会を前に、介護人材の不足に対する不安は大きい。慢性的な人手不足問題を抱えた介護分野において、職業としてのネガティブなイメージを払拭し、介護職を魅力ある職業選択として発信することで介護人材を確保しようとする試みが全国各地で行われているが、依然として課題は山積している。

厚生労働省は平成 26 年度の老人保健健康増進等事業において、介護への入職希望者拡大に向けたイメージアップを図る取り組みへの助成を行った。介護の専門職団体は介護の魅力をアピールする様々な啓発活動を行い、介護関係の各情報誌でも介護の魅力についての特集記事が頻繁に組まれてきた。しかし、そういった戦略によって、介護職へのネガティブなイメージを払拭しようとする一方で、新たな多重構造のステレオタイプを再生産してしまう側面があるのではないかという疑問が生まれた。

ステレオタイプに関する研究は、マイノリティに向けられたマジョリティからの差別的なまなごしを批判的に捉えたものが多い。また、差別する者、される者という 2 者対立の構造で捉えられたり、そのような構造を生む社会的背景が論じられることも多く見られる。本研究では、一般的な介護の職業イメージという、外的な権力によって形成されたステレオタイプという側面に注目しつつ、それを維持する役割を、介護業界が無自覚に担ってしまうという内側からの権力について問う。

また、介護の魅力発信事業そのものが、介護職のステレオタイプを再生産するメディアとなっているのではないか、という点に加え、盛んになった介護職の魅力発信が相談援助職への偏見を生んでいるのではないかという新たな疑問が浮上した。福祉分野内における現在の動向や新たな課題について踏み込んだ議論をしていきたい。

## オーラルヒストリー、メディア、作者

小西 卓三（昭和女子大学）

本発表は、口述資料を用いた歴史であるオーラルヒストリーと、メディア論、作者の関係性を明らかにした上で、「オーラルヒストリーの作者のあり方」について考察する。学問の政治の点から、オーラルヒストリーという術語を用いるが、本発表で検討される論点は、語り部研究、フィールドワーク、聞き書き、ライフヒストリー、ファミリーヒストリー、コミュニティ研究、セルフレポート、パーソナルナラティブ、伝記、自伝、回顧録などの研究・執筆実践にも、その大半があてはまると考えられる。

オーラルヒストリーは、語り手（インタビュアー、ナレーター）が誰かによって、作品が持つ意味合いも変わってくる。しかしながら、あまり話を聞かれることのない「普通の人々」や「周縁の人々」の声に耳を傾けることを、オーラルヒストリーが重要視してきたことについては、それほど異論はないだろう。

普通の人々、周縁の人々の声を重視するオーラルヒストリーは、メディア論の視点から考えるとオングの述べる「声の文化」に重きを置く学術実践と考えられる。しかしながら、テクノロジーの発達で音声のみならず動画によるオーラルヒストリーインタビューの保存も可能な現在、最終作品の形態が「文字の文化」を強化する方向であることも見逃してはならない。我々は、聞かれない声に耳を傾けているだろうか？

さらに、オーラルヒストリーの作品は、インタビュアーが作者として世に出されることがおおい。しかしながら、メディアを発信者（インタビューの語り手）と受け手（読者）の中間項と見なすと、研究者のあり方は変容を迫られる可能性を秘めている。オーラルヒストリーの作者とは、いったい誰であるのか？

B 会場 (2階B)  
Room B

研究発表  
Presentation

コミュニケーションと文化  
Communication and Culture

### 国語科指導要領にみる「日本的コミュニケーション」の素地

大橋 理枝(放送大学)

日本の国語科でどのような言語教育が指向されているのかを考察するため、学習指導要領及びその解説を検討した。その結果、「読み取」ることや「的確にとらえ」ることを重視した項目がみられ、日本の生徒たちは国語でも「正解」がある知の在り方を当然視して学び続けていく可能性が見えた。一方、テキストに書かれていることを基にして自分の論を展開するような読み方を指導するような項目は余り見当たらなかったことから、自分の意見や考えを相手に向けて返すことは期待されておらず、作者がその場にはいないテキストに対する批判は行っても、同じ教室という場にいるクラスメートの意見について直接論じることは避けようとしていることが推測された。更に、「話すこと」や「聞くこと」に関しては、小学校低学年のうちからクラスの意見を一つにまとめることが望ましいとされており、子供達は「意見が一致することは良いことである」という考え方をしっかりと学んでいくであろうことが分かった。また、相手の意見に批判的な感想をもった場合は、それを相手にぶつけるのではなく「考えの相対化を図る」ように指導されていることが見て取れた。つまり、合意が形成できないときは、意見の相違に基づいた「学習」が求められており、相手との衝突を回避していると考えられた。

日本の国語教育では「伝え合い」が重視されているが、指導要領中に見られる「伝え合い」とは、相手の発言を直接批判することのない「伝え合い」なのではないか。学級全体の意見一致は望ましいことであると捉えるが故に、批評・批判を行う対象はあくまでテキスト自体か他人の表現技巧的な面に留め、他人の考え方自体は直接批判しない、という態度が国語という教科を通して養われ、「日本人は議論下手」と言われる素地を作っているのではないだろうか。

### 不均衡を調和するものとしての重複発話 -日本人初対面の相互行為における異ジャンル間比較から-

竹田 らら(東京電機大学)

本発表では、上下関係のある初対面同士で、対人関係での不均衡が相互行為の中でどのように調和へ導かれるのかについて、2つのジャンルにおける重複発話から分析、考察する。

重複発話や割り込み(West and Zimmerman, 1983; Yamada, 1992; Yuan et al., 2007)、また、相互行為での不均衡の調和(村田, 2015)、そのいずれの先行研究でも、重複発話を、社会的役割や情報量の違いから生じる不均衡を調整するものとしては捉えてこなかった。これは、相互行為を動的に分析する考え方で、初対面同士の相互行為がなぜ円滑かを解明する一助になり得よう。そこで、重複発話は、社会的上位の人がその改まり度を下げて相手の視点に近づけたり、社会的下位の人が改まった場を崩して、話題や課題を完成に近づけたりする機能を持つとの仮説を掲げる。

データは、女性同士の対話を実験的な設定で収録した「ミスター・オー・コーパス」より、日本語話者同士11組の初対面の大学教員と大学生による自由対話と課題達成談話での録画資料と書き起こし資料である。このうち、自由対話では「びっくりしたこと」をテーマに5分以内で会話をしてもらい、課題達成談話では絵本から15枚の絵を拾って作成したカードを並べ替え、時間制限無しでひと続きの物語を組み立ててもらった。

分析の結果、自由対話では、初対面会話に付随する緊張感を最小限にすべく、相手への共感を前に出して下支えしたり、沈黙による間を減らしたりする機能が見られた。一方、課題達成談話では、相手の描写に意見を

重複させたり、相手のリードに乗っかって下支えしたりする機能が見られた。

以上の分析結果より、重複発話は、自己主張をしながらも、自他が調和して会話を作り上げるアサーティブな性質(荻原, 2002)を持つゆえに、対人関係での不均衡の調和で大きな役割を果たしていると主張する。

### 資本主義権力、規律権力と日本の高等教育機関の外国語教育 —いわゆる私立外大生を政治的にすることを中心に—

田島 慎朗 (神田外語大学)

宮崎 新 (名古屋外国語大学)

この研究は、日本の高等教育機関における外国語教育にまつわる言説をてがかりに、批判的・文化的アプローチからのコミュニケーション研究の限界と可能性を権力論から探ろうとするものである。資本主義権力と学校内の規律権力が顕著に発露している例として、外国語大学(以下、外大)の言説を主に扱う。外大は、政府のグローバル人材論をはじめとする新自由主義的改革からの影響を受けやすい。また、外大におけるコミュニケーションは、外国語という今まで知らなかった言語体系を学ぶということを基調にしているため、学生に被支配的な地位を学生に求め、学生もそれに従って従属的な主体を構成しがちな傾向にある。たとえば、某外大で行われた有償のボランティア育成イベントでの式事挨拶の一言「ボランティアのプロになってください」といったコミュニケーションは、その秩序維持に一役買っている。この研究ではそれらのコミュニケーションを研究対象とし、資本主義権力と外大生という主体の政治的可能性の射程を判断することを主目的とする。

論文では、まずミシェル・フーコーの権力論と現代の資本主義権力との関係を理論的に整理する。その後二つ目に、外大におけるコミュニケーションをあげ、資本主義権力が外大のコミュニケーションにどのように現前化しているかを確認し、権力の結合関係の描写を試みる。そして三つ目に、以上により導き出される外国語教育の政治的可能性と限界を考察する。

## 第46回年次大会実行委員会 Annual Convention Committee

### 大会実行委員長 Program Chair

野中 昭彦 (中村学園大学) Akihiko Nonaka (Nakamura Gakuen Univ.)

### 大会実行委員

清宮 徹 (西南学院大学) Toru Kiyomiya (Seinan Gakuin Univ.)  
宮原 哲 (西南学院大学) Akira Miyahara (Seinan Gakuin Univ.)  
鳥越 千絵 (西南学院大学) Chie Torigoe (Seinan Gakuin Univ.)  
松島 綾 (熊本学園大学) Aya Matsushima (Kumamoto Gakuen Univ.)

オンライン受付及び大会運営サポート：トップツアー株式会社 東京法人西事業部

### 実行委員 (JCA) JCA Committee Members

#### ①大会プログラム・学術局関連 Convention Program

責任者 守崎 誠一 (関西大学) Seiichi Morisaki (Kansai Univ.)  
高井 次郎 (名古屋大学) Jiro Takai (Nagoya Univ.)  
野中 昭彦 (中村学園大学) Akihiko Nonaka (Nakamura Gakuen Univ.)  
森泉 哲 (南山大学) Satoshi Moriizumi (Nanzan Junior College)

#### ②大会プログラム・発表査読者 Review Committee

坂井 二郎 (東京福祉大学) Jiro Sakai (Tokyo Univ. of Social Welfare)  
高井 次郎 (名古屋大学) Jiro Takai (Nagoya Univ.)  
野中 昭彦 (中村学園大学) Akihiko Nonaka (Nakamura Gakuen Univ.)  
宮崎 新 (名古屋外国語大学) Arata Miyazaki (Nagoya Univ. of Foreign Studies)  
森泉 哲 (南山大学) Satoshi Moriizumi (Nanzan Junior College)  
守崎 誠一 (関西大学) Seiichi Morisaki (Kansai Univ.)

#### ③受付・事務局関連 Registration

責任者 清宮 徹 (西南学院大学) Toru Kiyomiya (Seinan Gakuin Univ.)  
菅家 知洋 (東海大学) Tomohiro Kanke (Tokai Univ.)  
松島 綾 (熊本学園大学) Aya Matsushima (Kumamoto Gakuen Univ.)  
森 拓也 (トップツアー) Takuya Mori (Toptour Corporation)

#### ④大会広報関連 Advertisement

責任者 高永 茂 (広島大学) Shigeru Takanaga (Hiroshima Univ.)  
小山 哲春 (京都ノートルダム女子大学) Tetsuharu Koyama (Kyoto Notre Dame Univ.)  
今井 達也 (南山大学) Tatsuya Imai (Nanzan Univ.)

**コミュニケーション学会 会長及び本部（学会事務局） President and Office of JCA**

会長 President 五島 幸一 (愛知淑徳大学) Koichi Goshima (Aichi Shukutoku U.)

学会事務局 JCA Office :

〒814-8511

福岡市早良区西新 6 - 2 - 92

西南学院大学文学部外国語学科

清宮研究室内

日本コミュニケーション学会事務局

Phone: 092-823-4541

E-mail: cajoffice@caj1971.com

Department of Literature

Seinan Gakuin University

6-2-92 Nishijin, Sawara-ku, Fukuoka, 814-8511 Japan

The Office of Japan Communication Association

Phone: 092-823-4541

入退会、住所等変更、会費納入、及び学会誌バックナンバーと記念図書購入申込に関する問合せ先 :

For inquiries regarding membership, dues, and publications:

一般社団法人 学会支援機構

〒112-0012 東京都文京区大塚5-3-13

小石川アーバン4F

Phone : 03-5981-6011 FAX : 03-5981-6012

E-mail: caj@asas.or.jp

Association for Supporting Academic Societies

Koishikawa Urban 4F

5-3-13 Otsuka Bunkyo-ku Tokyo, 112-0012

<memo>



ひつじ研究叢書（言語編） 第129巻

## コミュニケーションへの言語的接近

定延利之著 定価 4,800円+税

本書は、現代日本語の話しことばの観察を通じて、「コミュニケーションとはお互いを理解するためのメッセージのやりとりだ」といった言語研究に広く深く浸透しているコミュニケーション観の問題点を明らかにし、それに取って代わる新しいコミュニケーション観の姿を追求したものである。言語研究がコミュニケーション研究にどのように貢献でき、コミュニケーション—言語—音声をつなぐ架け橋となり得るかが具体的に示されている。



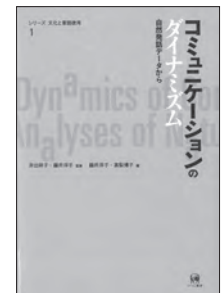
シリーズ 文化と言語使用 1

## コミュニケーションのダイナミズム

—自然発話データから

井出祥子・藤井洋子監修 藤井洋子・高梨博子編 定価 2,600円+税

シリーズ「文化と言語使用」第1巻。日本語の言語使用にみる「場」の共創、感情表出の指示詞、反応発話、即興的に生まれる遊びや身体化の視点から言語コミュニケーションのメカニズムや多様性、ダイナミズムについての考察を展開する。執筆者：熊谷智子、菅原和孝、鈴木亮子、高梨博子、成岡恵子、藤井洋子



## 雑談の美学—言語研究からの再考

村田和代・井出里咲子編 定価 2,800円+税

待望の「雑談」の言語学。雑談とは何か？ 雑談とそうでないものの境界線は？ 政治家の演説や裁判員評議、鮎屋のカウンターから、登山者仲間内のゴシップ、アフリカ、グイの人々の雑談のおしゃべり、LINEやチャット、手話による雑談の相互行為まで。人間社会を形づくる日常生活のさまざまな雑談の本質に切り込む実証的研究論文13編を収録。



## グループワークで日本語表現力アップ

野田春美・岡村裕美・米田真理子・辻野あらと・藤本真理子・稲葉小由紀著

定価 1,400円+税

グループワークを活用した大学1年生向けの文章表現のテキスト。豊富な課題に取り組むことで情報発信力・コミュニケーション力・アピール力を高める第一部と、アカデミック・ライティングを学びながらレポートを完成させる第二部からなる。文章表現の基本的な知識や姿勢からレポート執筆まで、グループワークで楽しく学び、効果的に習得できる。初年次に必要な内容を盛り込むとともに、将来社会で役立つ力の基礎も身につけさせるテキストである。



## 英語の学び方

大津由紀雄・嶋田珠巳編 定価 1,500円+税

英語が使えるようになりたいと思っている人は多いが、悩みを抱える人もまた多い。本書では、英語学習を効果的かつ効率的に進めるために必要なことを、わかりやすく解説。英語の構造や機能、辞書の利用法のほか、類書ではあまり触れられないことのない世界の諸英語やノンバーバル・コミュニケーションの視点も取り入れ、英語を学ぶ秘訣に迫る。執筆者：大津由紀雄、瀧田健介、高田智子、津留崎毅、小林裕子、嶋田珠巳、原和也、遊佐昇、安井利一



# 国際社会学

宮島 喬・佐藤成基・小ヶ谷千穂 編 A5判 2700円

世紀をまたぎ、グローバル化は社会に広く浸透した。現状が突きつける課題に対し社会学はいかに応答し、問題を明らかにするのか。



# 広告コミュニケーション研究ハンドブック

水野由多加・妹尾俊之・伊吹勇亮 編 4104円

広告をコミュニケーションとして捉える現在の研究動向をふまえ、全体像を幅広く解説。



# 現代人の国際社会学・入門

—トランスナショナリズムという視点— 2016年5月刊

西原和久・樽本英樹 編 有斐閣コンパクト 予価2376円

人やモノ、文化の越境を草の根レベルで捉え、グローバル化社会の現状を考察するトランスナショナリズムの視点でまとめた入門書。

# 非常時対応の社会科学

—法学と経済学の共同の試み— A5判

齊藤 誠・野田 博 編 2016年3月刊 4212円

東日本大震災を事例に、非常時における行動規範をいかに確立すべきかについて、法学と経済学の知見から検討。



# コミュニケーション論をつかむ

辻 大介・是永論・関谷直也 著

テキストブックス[つかむ] 2160円

コミュニケーションとは、いったいどういう営みなのか。身近な事例を切り口に、学際的・複眼的な視点で読み解く入門書。



# スケープゴートینگ

—誰が、なぜ「やり玉」に挙げられるのか—

釘原直樹 編 A5判 2808円

大きな事故・災害の際に生じる特定の対象への非難のメカニズムについて、実証研究から解明。



# 多文化世界 原書第3版

—違いを学び未来への道を探る—

G.ホフステード/G.J.ホフステード/M.ミンコフ 著 岩井八郎・岩井紀子 訳 A5判 4212円

データにもとづく組織の比較文化論。世界的ベストセラーの翻訳。グローバル化の時代に何が求められるか？ 世界的ベストセラーの翻訳。



# はじめて学ぶ 異文化コミュニケーション

—多文化共生と平和構築に向けて—

石井 敏・久米昭元・長谷川典子・有斐閣選書 桜木俊行・石黒武人 著 2160円

多文化社会に生きる現代の学生・社会人に必要な、知識と考え方を提供。



有斐閣 出版案内 東京・神田・神保町2 TEL:03-3265-6811 http://www.yuhikaku.co.jp/ (価格は税込)

◎図書目録送呈◎

# ナカニシヤ出版

TEL 075-723-0111 〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15

FAX 075-723-0095 http://www.nakanishiya.co.jp/ (表示は本体価格)

『シリーズ』メディアの未来①  
**メディア・コミュニケーション論**  
池田理知子・松本健太郎 編著  
コミュニケーションとメディアの捉え方を根底から問う。 2200円

『シリーズ』メディアの未来②  
**メディア文化論**  
遠藤英樹・松本健太郎・江藤茂博 編著  
メディアが多様な形態で発達を遂げた今日、私たちがとりまく文化はどう変容しているのか。 2400円

『シリーズ』メディアの未来③  
**メディア・リテラシーの現在**  
池田理知子 編著 ◎公害 環境問題から読み解くメディアと私たちの関係を公害/環境問題を軸に問い直し、新たな対話の地平を拓く。 2400円

『シリーズ』メディアの未来④  
**観光メディア論**  
遠藤英樹・寺岡伸悟・堀野正人 編著  
モバイルメディアの発展や文化の変容に伴い、揺れ動くメディアと観光の不思議な関係をやさしく読み解く。 2500円

『シリーズ』メディアの未来⑤  
**音響メディア史**  
谷口文和・中川克志・福田裕大 著  
十九世紀から現代に至るまでの音のメディアの歴史を詳らかにし、技術変化と文化の相互作用を論じる。 2300円

『シリーズ』メディアの未来⑥  
**空間とメディア**  
遠藤英樹・松本健太郎 編著  
◎場所の記憶・移動・リアリティ  
テーマパーク・境界・風景……多様な切り口から空間を読みほぐす。 2700円

『シリーズ』メディアの未来⑦  
**日常から考える コミュニケーション学**  
池田理知子 著 ◎メディアを通して学ぶ「メディア」の分析を通して、コミュニケーション学とは何かを学ぶ。 2000円

『シリーズ』メディアの未来⑧  
**コミュニケーション研究法**  
末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子 編著  
研究倫理などの心構えから、フィールドワークや実験法、質問紙法、統計まで、コミュニケーションに関する多彩な研究手法を網羅して解説する。 3200円

『シリーズ』メディアの未来⑨  
**シロアリと生きる**  
池田理知子 著 ◎よそものが出会った水俣「伝統構法」の家を建て移り住んだ水俣からみえてきた日常と近代化のさまざまな矛盾——「共生」の意味をとらえていく珠玉のエッセイ。 2000円

『シリーズ』メディアの未来⑩  
**コミュニケーション研究のデータ解析**  
田崎勝也 編著  
統計理論と実際の解析をユーザー視点からバランスよく解説。社会調査士E科目のテキストとしても最適。 3200円

『シリーズ』メディアの未来⑪  
**幸福を目指す 対人社会心理学**  
大坊郁夫 編  
◎対人コミュニケーションと対人関係の科学  
円滑な人間関係を築くには、社会心理学の最新の知見をもとに提言。 3000円

『シリーズ』メディアの未来⑫  
**コミュニケーション研究のデータ解析**  
田崎勝也 編著  
統計理論と実際の解析をユーザー視点からバランスよく解説。社会調査士E科目のテキストとしても最適。 3200円



# Campus Support Seinan is a proud JCA sponsor!

## Language Services

Our team of bilingual translators provides swift and precise Japanese to/from English translations to clients of various linguistic needs.

- As each member of our team is fluent in both English and Japanese, we are able to compose translations with robust accuracy while preserving - in full integrity - the nuanced undertones that are so often lost in translation.
- Aimed at bridging the gap between English and Japanese communication, other services we provide include **interpretation**, **linguistic training**, and **international exchange logistics**.
- We proudly serve clients in prefectural government, local municipalities, and a total of six universities throughout Japan.



## General Printing

(posters, flyers, business cards, Holiday cards, etc.)

## Event Operations Management

(Seinan-related Concert Management, Official TOEIC Venue Operations)

## Seinan Gakuin Official Merchandising

(ball-point pens, Japanese fans, pouches, Seinan Tirolian, Senafi, etc.)



Campus Support SEINAN

1-14-29 Momochi, Sawara Ward, Fukuoka 814-0006  
Tel: +81 92-823-3576 Fax: +81 92-823-3590  
[www.cs-seinan.co.jp](http://www.cs-seinan.co.jp)

